

## 熊本県におけるヤマネ *Glirulus japonicus* の分布

安田 雅俊<sup>1, 4)</sup>, 大野 愛子<sup>2, 4)</sup>, 井上 昭夫<sup>2)</sup>, 坂田 拓司<sup>3, 4)</sup>

<sup>1)</sup>森林総合研究所九州支所森林動物研究グループ, <sup>2)</sup>熊本県立大学環境共生学部  
<sup>3)</sup>熊本市立千原台高等学校, <sup>4)</sup>熊本野生生物研究会

### Distribution of the Japanese dormouse *Glirulus japonicus* in Kumamoto Prefecture, southwestern Japan

Masatoshi Yasuda<sup>1, 4)</sup>, Aiko Ohno<sup>2, 4)</sup>, Akio Inoue<sup>2)</sup>, and Takuji Sakata<sup>3, 4)</sup>

<sup>1)</sup>Forest Zoology Laboratory, Kyushu Research Center, Forestry and Forest Products Research Institute  
<sup>2)</sup>Faculty of Environmental and Symbiotic Sciences, Prefectural University of Kumamoto  
<sup>3)</sup>Kumamoto Municipal Chiharadai High School, <sup>4)</sup>Kumamoto Wildlife Society

#### はじめに

ヤマネ (*Glirulus japonicus*, 齧歯目ヤマネ科) は, 1 属 1 種の日本固有種で, 本州, 四国, 九州および隠岐島後に生息する哺乳類である (阿部ほか 2008). 主に樹上性で, 夜行性の小型種 (体重 20–40 g) であるため, 活動中の野生個体が直接観察される機会はほとんどない. また, 国の天然記念物かつ非狩猟獣であるため, 意図的な捕獲の機会もほとんどなく, 本種の生息地や現状は十分に把握されていない. 一方で, 国の天然記念物であり, 絶滅のおそれがある種 (環境省のレッドリスト: 準絶滅危惧; 熊本県のレッドリスト: 絶滅危惧Ⅱ類) でもあるという本種の希少性に加え, しばしば人家周辺で冬眠個体が発見されるために, 新聞記事等として生息記録が残りやすいという特徴がある. 安田・坂田 (2011) は, これまでに報告された生息記録を含む文献資料を整理し, 九州におけるヤマネの分布の特徴, すなわち, 低標高の照葉樹林から高標高の落葉広葉樹林まで垂直的に幅広く分布すること, 九州に少なくとも 8 カ所の主要な生息地があることを明らかにした. しかし, 目撃からなる未発表情報の整理は, 報告数の地理的な偏りが大きく, ほとんどの目撃情報が熊本県内から寄せられたものであったため, 課題として残されていた.

熊本県におけるヤマネの分布情報の蓄積は, 巣箱と自動撮影カメラを組み合わせた調査方法 (以下, 巣箱自動撮影法) の採用により, 近年著しく進展した (大野ほか 2010; 坂田ほか 2010, 2011, 2012). しかし, 互いに隣接した森林において同じ調査法を採用したにもかかわらず, 本種の生息が確認されなかった地点がある (坂田ほか

2012). 現時点におけるヤマネの在不在の情報を整理することは, 本種の個体群の存続に必要なハビタットの質や量を検討するために, また, 今後の生息調査の候補地を選定するために重要であろう. そこで本稿では, 安田・坂田 (2011) の結果に, 過去の目撃情報, 最近の著者らの生息調査, および生息記録の文献調査の結果を加えて, 熊本県におけるより詳細なヤマネの分布を提示することを試みた. ヤマネは背面正中線に特徴的な 1 本の黒い縞をもつため, ある程度の知識をもつ者であれば種同定を誤ることはほとんどないと考えられる. よって, 目撃情報はあくまで未確認の生息情報であるが, 本種の潜在的な分布を把握するには十分利用できると考えた.

本研究を行うにあたり, 林野庁九州森林管理局管内の森林管理署から国有林における調査許可を受けた. また, 各地の森林管理署職員, 熊本県松橋収蔵庫, 菊池溪谷を美しくする保護管理協議会, 高千穂町コミュニティセンター歴史民俗資料館 緒方俊輔氏, 熊本山里通信社 栗原寛志氏, 湯前町役場 浅田徹氏, 熊本野生生物研究会ならびに自然観察指導員熊本県連絡会の会員諸氏, そのほか多くの地域住民の方々から貴重な情報や資料の提供を受けた. ここに記して感謝する. 本研究の一部は, 独立行政法人森林総合研究所九州支所と熊本県立大学との共同研究「阿蘇地域における森林と動物の相互作用の解明」において行われた (森林総合研究所試験研究課題番号 G 212). また, 本研究の一部は, 財団法人再春館「一本の木」財団から助成を受けて行われた.

#### 方 法

2006~2011年, 自然に関心が高い熊本県内の個人ある

いは団体を対象として、直接あるいは電子メールにより、ヤマネの目撃についての聞き取り調査を行い、可能な限り詳細に目撃地点と時期を記録した。目撃地点の緯度経度は、国土地理院の地図閲覧サービス (URL: <http://watchizu.gsi.go.jp>; 2012年2月1日版) を利用し、電子国土基本図 (地図情報) より得た。

巣箱自動撮影法 (安田・栗原 2009; 大野ほか 2010; 坂田ほか 2010, 2011, 2012) により、以下の調査を行った。熊本県内の7地点と宮崎県内の3地点の天然林において、ヤマネの活動期 (春～秋) に、1地点につき1-12台の自動撮影カメラ (SensorCamera Fieldnote シリーズ, (株)麻里府商事, 山口) を樹上に設置した巣箱に向けて設置し、巣箱を訪れる動物を撮影した。ほとんどの地点において、ヤマネが撮影された時点で調査を打ち切り、ヤマネが撮影されなかった場合には調査を継続する方法をとったため、地点ごとの調査努力量は14~358カメラ日と大きくばらついた。調査地点の緯度経度は携帯型GPS (Magellan Triton 500, Magellan, CA, USA) を用いて記録した。

さらに、安田・坂田 (2011) に従い、時期と地点がおおむね特定できる生息記録について文献調査を行った。

解析には、Quantum GIS ver. 1.7.3 (Quantum GIS Development Team, URL: <http://qgis.org>; 2012年2

月1日版) を用いた。目撃情報と新たな生息記録は、1990年以前と1991年以降 (最近20年間) に区分して整理した。

## 結 果

既存のヤマネの生息記録の分布図 (安田・坂田 2011; ただし、これには坂田ほか (2011, 2012) の妙見を含む;  $n=54$ ) に、熊本県と宮崎県におけるヤマネの目撃情報10件、巣箱自動撮影法による在不在情報12件 (坂田ほか (2012) の立神と古麓を含む)、文献による生息記録1件を追加し、熊本県周辺を図示した (図1)。また、1991年以降の目撃地点および生息地点を中心とする半径10kmのバッファを示した。これは、ヤマネ成獣の移動能力に基づき、好適なハビタットが連続する地域において中長期的にヤマネが分散可能な範囲として仮定された値 (安田・坂田 2011) である。

熊本県内から8件、宮崎県内から2件の目撃情報が寄せられた。1990年以前の目撃情報 (図1の△) は計2件あり、熊本県菊池市 (鞍岳) と水上村 (市房ダム湖畔) からそれぞれ1件であった。1991年以降の目撃情報 (図1の▲) は8件あり、熊本県阿蘇市 (菊池溪谷上流)、菊池市 (菊池溪谷下流)、八代市 (東陽町河俣)、八代市 (大金峰山)、八代市 (久連子川沿い)、五木村 (端海野)

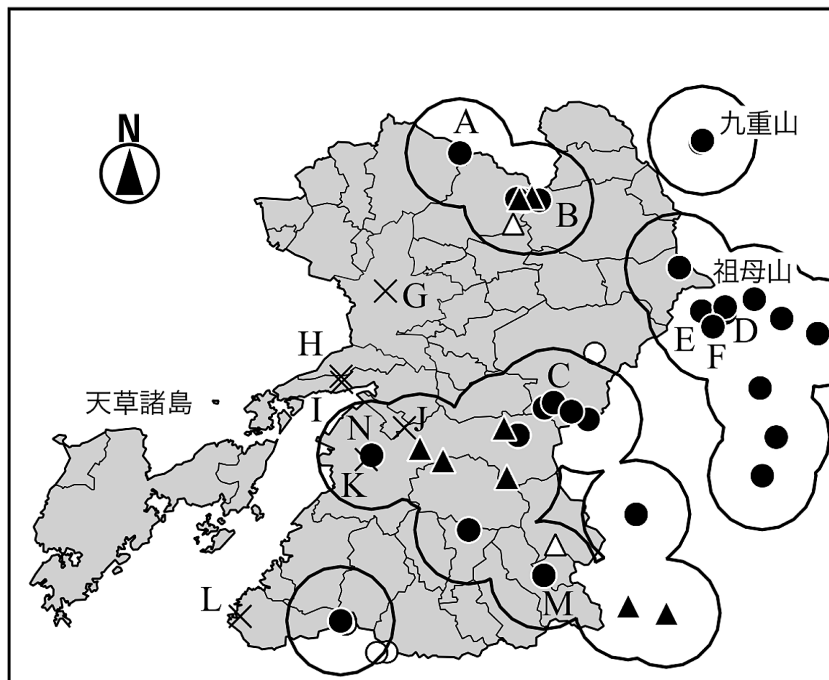


図1 熊本県とその周辺におけるヤマネの分布。△：1990年以前の目撃情報；▲：1991年以降の目撃情報；○：1990年以前の生息記録 (安田・坂田 (2011) を改変)；●：1991年以降の生息記録 (安田・坂田 (2011) に本研究の成果を追加)；×：生息が確認されなかった地点。地点 A~N の説明については本文を参照のこと。1991年以降の目撃情報と生息記録の地点から半径10 km のバッファを実線で示した。